

2024年度  
信州発・これらからの図書館フォーラム第3回  
「読書の未来 信州の読書の歩みを道標として」



2025年3月8日（土）山崎沙織

# 本日お伝えしたいこと：読書の広がり可能性

- 読書で伝わるのはページに書かれた情報だけではない
- 本が存在することによってつくりだされる人と人のつながりがある
- 本を起点に、本に書かれたことを超えて生み出される情報や人と人のつながりは、更に重要になる

長野図書館のミッション：「知る」「出会う」「育む」を3本柱とする「共知・共創の広場」であること（2021年7月制定）

思考、対話、体験を通して「実感ある知」の循環を生む「出会い」の場

# 講演の概要

- 自己紹介に代えて：私の「本との出会い、人との出会い」
- 読書への視点：本に何が書かれているか、本が読まれているかを越えて
  - ✓ 第3代県立長野図書館長 叶沢清介の慧眼
  - ✓ 読者についての研究のはじまりと広がり
- **長野県PTA母親文庫の歴史：参加者はどう読み、何を知ったか**
  - ✓ 母親がイエで読む（1950～）→親子が家庭で一緒に読む（1970年代末～）  
→母親たちが小学校で子どもたちに読みきかせる（1990年代末～）
- これからの図書館への期待

# 私の「本との出会い、人との出会い」

いつ	「本との出会い、人との出会い」
18歳まで 諏訪で育つ 諏訪清陵高校	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>図書館と読書が好きな子ども。</b> でも、「本を読むこと」だけが好きだったのではないような・・・<ul style="list-style-type: none"><li>✓ 母と図書館に通う道の楽しさ</li><li>✓ 母に言葉を絞らせた『流れる星は生きている』</li><li>✓ 高校の図書委員会仲間との司書室でのおしゃべり</li></ul></li></ul>
大学時代 東北大学 人文社会科学科	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>私たちの在り方とメディアの関係に興味→社会学専攻</b><ul style="list-style-type: none"><li>✓ 卒業論文「公共図書館は『フォーラム』になりうるか」</li><li>✓ 交換留学先（アメリカ）の「<b>未来をつくる図書館</b>」で調査</li><li>✓ 「悪魔の祭り」批判への図書館員の方の切り返しに感動</li></ul></li></ul>
大学院時代 東京大学 学際情報学府	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>長野県PTA母親文庫の研究をはじめ</b><ul style="list-style-type: none"><li>✓ 学部時代からの興味、プラス、「母親であることと読書すること」への興味</li><li>✓ 母親文庫の見学で、<b>読書活動の懐の深さを実感</b><ul style="list-style-type: none"><li>● 島崎藤村のふるさとを訪ねるイベントのバスの車内で 「<b>こういうの（漬物のレシピ）を教えてもらうのもね、全部が文庫での『勉強』なの</b>」</li></ul></li></ul></li></ul>



**「本を手取る」だけでも  
人々の暮らしは変わる**

母親が全部回った本を読んだとは決して思わない。

しかしそれぞれの母親の手許に回ることは回った。

従って私はそのころからずっと母親が本を読むことになったとは言わなかった。

常に母親が毎月一冊の本を手取っているという言葉を使った。

『図書館、そしてPTA母親文庫』 p.212-213.

## 第3代県立長野図書館長 叶沢清介の慧眼 ②

半世紀経って、時代が叶沢館長に追いついた？！

欧米の「みんなで読む」イベントにフォーカスした研究書（2013）

We consider how and why people come together to share reading beyond or outside of their solitary encounter with a text, or how they might participate in an organized event without even having read the featured book. We explore the pleasure to be experienced beyond rather than between the covers, as a book is mediated through a series of live activities, broadcast and staged entertainments, public spaces, and other people.

人びとはどのようにして、また、なにゆえに、自分ひとりで書かれた文章に向き合うことを超えて、あるいは、そうしたこととしてではなく、読書をシェアするために集うのか、というのが、私たちが問おうとしていることです。その問いは、課題図書を読みもしない人々はどのようにして読書イベントに参加しているか、と言い替えることもできます。

私たちは人びとが経験する読書の喜びについて探求します。その喜びは、本の表紙から裏表紙までの間に留まるものではありません。というのも、本は、暮らしの中の活動によって、あるいはテレビ・ラジオ等の放送や舞台によって、そしてまた公共空間や周囲の人々によって、連続的に媒介されている [媒介されながら私たちの人生にかかわってくる] ためです。（拙訳）

Daniell Fuller and Denel Rehberg Sedo 『Reading Beyond the Book』 (p.3)

# 読者についての研究の始まりと広がり①

- 20世紀半ばのニュークリティシズム（新批評）の勃興
  - ✓ 物事には本質がある、世の中には普遍的価値が存在する、文学にはそれらが表現されている、という考え方の否定
  - ✓ 本質や普遍的価値に代えて文学の構造を探求
- ニュークリティシズムから読者論へ
  - ✓ 文学の構造も存在しない→読者がどのように物語を解釈しているかに焦点化
    - テクストと読者の相互作用（W.イーザー 『行為としての読書』 1982）
    - 解釈共同体（S.フィッシュ 『このクラスにテクストはありますか』 1992）
    - 書物の出版、流通の状況と読書形態（R.シャルチエ 『読書と読者』 1994）
    - 同じ書物を読む人の『想像の共同体』（B.アンダーソン）

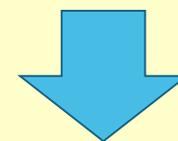
# 読者についての研究の始まりと広がり②

- 「正当」な文学解釈への疑義の提起と読者による「密猟」の隆盛
  - ✓ 読者の「密猟」(M.セルトー『日常実践のポイエティーク』1987)の発見
    - 「密猟」＝作家が読んでほしいように読むのではなく、自分の立場や体験にひきつけながら自由に読む
    - 「密猟」の活発化⇒20世紀末に大規模読書会(ex.オブラ・ブッククラブ)が隆盛
  - ✓ 「密猟」＝勝手な解釈では【ない】
    - そもそも、「正当」な文学解釈は存在しない
    - 「正当」とされてきた解釈は「白人」の「男性」の価値観を帯びた解釈
    - 「正当」な解釈を一律に規定するのではなく、様々な社会的立場の人の解釈を並立させることが大切
    - 「密猟」が読者を力づけ、読者の人生を豊かにすることが注目されている

# 長野県PTA母親文庫（1950～2013）とは？

- 「戦後における女性利用サービスの代表的なもの」  
(奥泉和久『図書館史の書き方・学び方』2014)
- 1950年に、信州大学付属小の母親が、母親のための本を求めたことから始まる
- 県立図書館の本の団体貸出を受け回覧（配本）するのが基本  
(1961年、団体貸出のルートが県下全域を網羅)
- 最盛期の1960年代には、県内全域で年度平均約7万人が参加  
(活動末期の90年代でも約1万6千人が参加)

**1950年～1970年代半ばの母親文庫  
母親が、イエで、ひとりで読む**



# 新教育の開始と産業化を背景とした創設



- **創設～1970年代半ば：母親自身の学習機会を熱望**
  - ✓ トイレの汲み取りをして資金確保→文庫誘致したグループも
  - ✓ 本の回覧に加え、文集の作成、図書館大会での発表&話し合いも
- **社会の変化に取り残されてしまうという焦燥が原動力**
  - ✓ 子どもは新教育を受け、産業化に対応するための知識やふるまいを獲得
  - ✓ 夫や一世代下の女性は、イエの外で就労して産業化に対応
  - ✓ 自分たち以上の世代の女性だけが、イエの田畑に取り残されて「遅れて」いる
- **子どもが大きくなっても、「子どもと話のできる」  
(=子どもと同等の知識を備えた) 母親でありたい**

# 1950年～1970年代半ばの母親文庫の読書の情景



「私も母さん農業の担い手として、私なりきに活躍して居る一人ですが、子供もみんな学校へ上がり、勉強に追われるようになると、母親として何か私も一緒に晩の一時を本を読んで俱々勉強する環境を作りたいと思っておりましてところ、母親文庫の巡回が始まり、種々の本が廻されて来ました。

子供のしつけの本、現代の子供の考へ方、或る先生の日記等、易しい本を数冊読んだだけですが、夕食後子供は机に向かって居る。私も部屋は別でも俱に本を読んでいる。そういう雰囲気の子供の勉強に何か張り合いを持たせるような気がしました。

私も俱に勉強するお母さんも本を読んで居るから私ももう少し算数を頑張るかな、と隣の勉強部屋から姉さんの声がした。

何か私もウツラウツラと疲れが出て文字を見ているだけの頭にハッと思考力がよみがえった。

(「子どもと俱に」文集『すわ』4号、1965年刊、p.27)

**母親は直接子どもを世話する訳ではない。**

**しかし、読もうとする母親の背中が子どもを勉強へ促す。**

# 1950年～1970年代半ばの母親と子どもと本との関係

学校（新教育）



知識



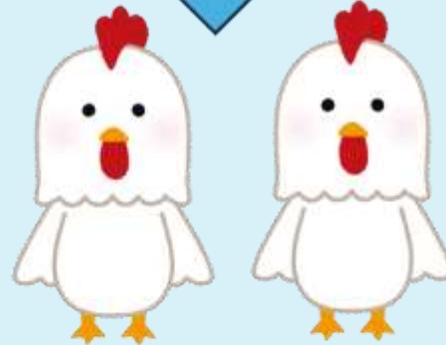
子ども

子ども

本



知識



母親

母親

- 本は、社会の産業化についていくのに必要な知識の源
- 子どもは学校で勉強  
母親は本を読んで勉強
- 社会と共に進化する子  
⇔社会の変化に遅れがちな母
- 「『遅れた』母親が子どもと分かり合うためには  
まず読書が必要」と述べ  
学習機会を確保

# 「読めない」と言い合うことの効用

本



知識



読めない



母親

連帯感

連帯感



母親

読めない

- 「読書の文集か不読書の文集かわからぬ」状態だったが・・・  
(辻村輝雄『戦後信州女性史』1978)
- 「読めない」は、農家の嫁の務めを果たしつつ読もうと奮闘していることを伝え合う言葉
- 「読めない」と言い合うことは、**農家の嫁をやっているだけではいけない／イエの外に目を向けていいことを確認し合うための言葉**
- 本を手にとっていたからこそ「読めない」と言えた

# 1970年代末～1990年代の母親文庫 母親と子どもが、家庭で、一緒に読む



# 1970年代末の変化 1/2



- **時代背景①：産業化の弊害が露呈**
  - ✓ 環境問題、子どもの「不良化」、「人間らしい」感情の喪失 etc.
- **時代背景②：母親文庫参加者世代もイエの外で就労**
  - ✓ 1960年時点で、参加者世代の就業先は農業55.9%、製造業17.2%
  - ✓ 1980年時点で、参加者世代の就業先は農業14.8%、製造業38.6%

(国勢調査の長野県全体の数字より)

  - ✓ 母親だけが産業化に「遅れて」いる状態の終焉
  - ✓ 産業化社会に必要な知識の源泉としての本の価値が相対的に低下
  - ✓ 母親と子どもが上手く話せないのは、母親が産業化社会を知らないからではなく、母親が産業化社会に過剰に適応しているから

# 1970年代末の変化 2/2

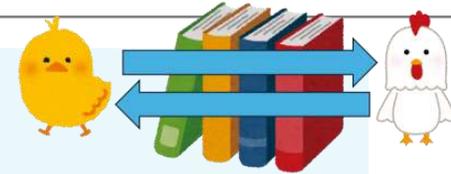


- 本から何が得られるかについての説明の変化
  - ✓ 産業化について行くための知識が得られる
    - ⇒ 産業化社会で見失われがちな価値を（再）発見する機会が得られる
- 誰にとって読書が必要かについての説明の変化
  - ✓ 読書を必要とする度合い 母親 > 子ども ⇒ 母親 < 子ども
  - ✓ 産業化以前を知っている母 ⇔ 産業化社会に生まれ育つ子ども
  - ✓ 母親は子どもの読書習慣を育むべき
- 母子の相互理解と読書についての説明の変化
  - ✓ 子どもの理解に必要なのは 本から得る知識 ⇒ 直接触れ合う機会

**親子で一緒に読めば、子の読書習慣も母子の相互理解も育める！**

# 1970年代末～1990年代半ばの母親文庫の読書の情景

我家では、寝る前に二人の子供に、一冊ずつ本を読むようにしています。（中略）



本の楽しさを知ってほしいと思い、長男が絵本に興味を持ち始めた頃から、読み聞かせを始めました。（中略）

本を読むひとときは、本の内容を楽しむばかりでなく、三人で布団の上に横になってくつろぐというゆとりの時間でもあります。ふだん話というと、おこごとや注意が（いけないことは、思いながら）、多くなってしまうのですが、この時間だけは、子供達の疑問や想像などのおしゃべりにつきあって、落ちついた気持ちになれます。

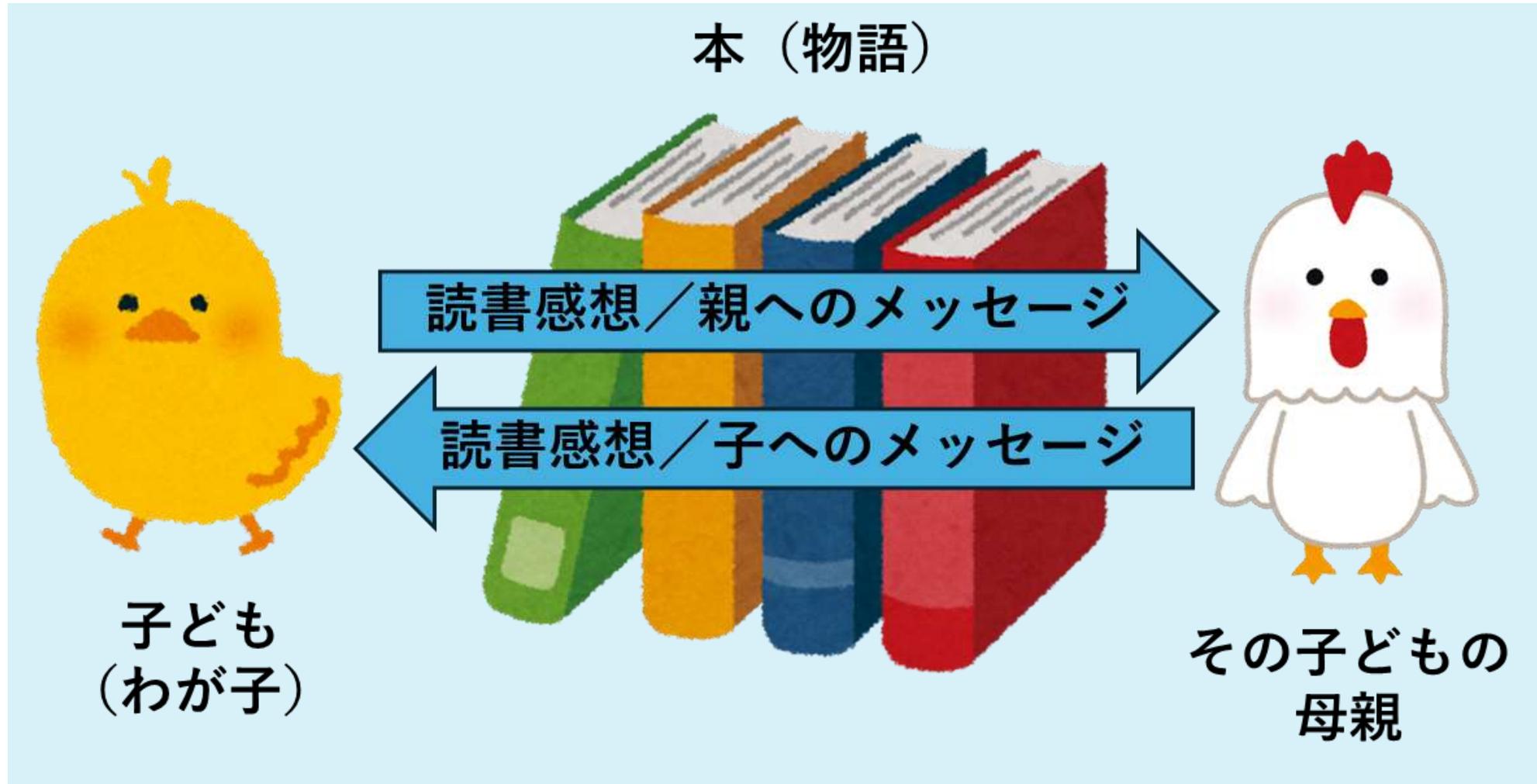
子供達の方もゆっくりしている私には、話しやすいようで、本についての話だけでなく、学校や幼稚園でのできごとなども話してくれます。（中略）寝る前のひとときを大切に、良いコミュニケーションの場にしていきたいと思えます。

（「読み聞かせについて」文集『すわ』27号、1988年刊、p.36）

**母子は、互いの読書感想を含めて、物語を味わう。**

**本を起点に、本の内容を越えて、母子の会話が広がっていく。**

# 1970年代末～1990年代半ばの母親と子どもと本との関係



# 物語から「脱線」していく親子読書の感想文

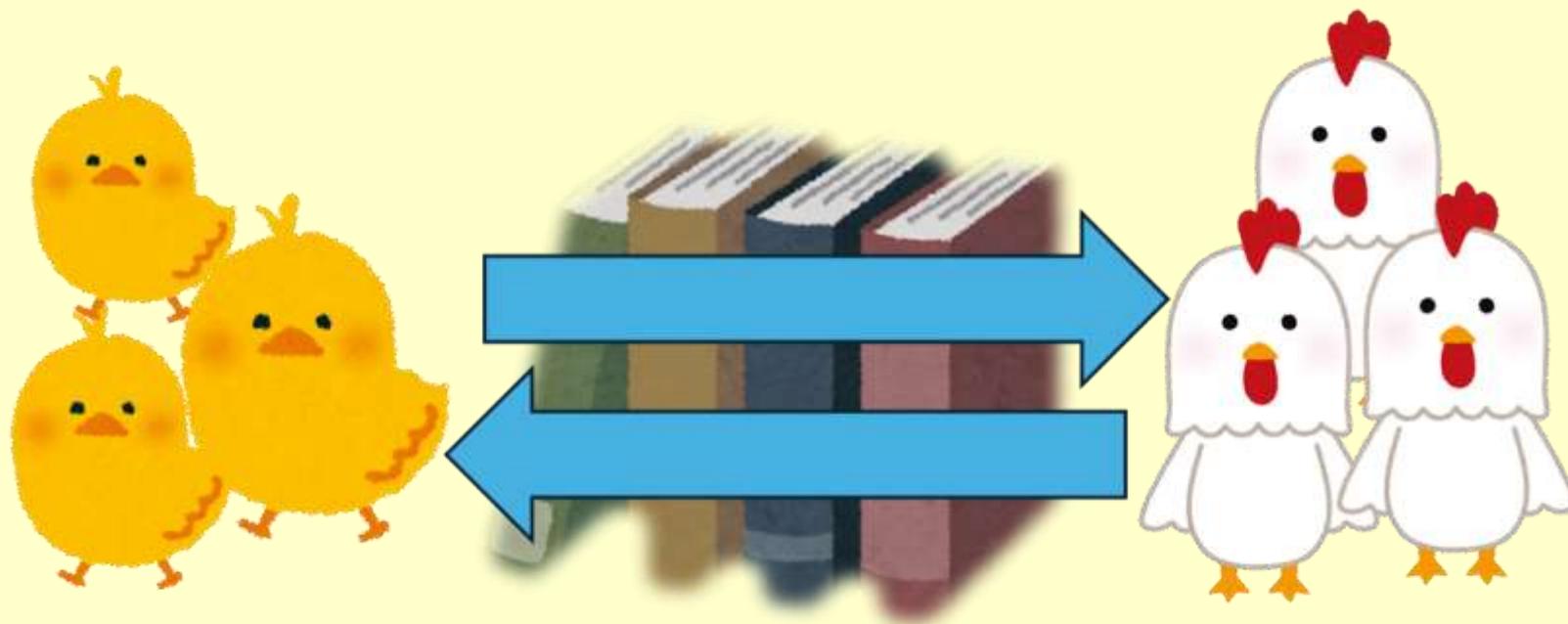


- 子どもの読書感想は、  
母親が、その子ならではのものの見方を知る手がかり  
✓ 母親の「読書感想」は、もとの物語についての感想というより  
子どもの感想文についての感想
- 親は子に、本にことよせたメッセージを発信  
✓ 親子読書の感想文集は、親から子へのメッセージ集のおもむき
- 親子読書の体験が、子どもが親を求めていることを発見させる  
✓ 母の読み聞かせを夢中で聞き終えた子どもの感想は  
「本の内容よりも、『お母さん、又読んでね。』」だった

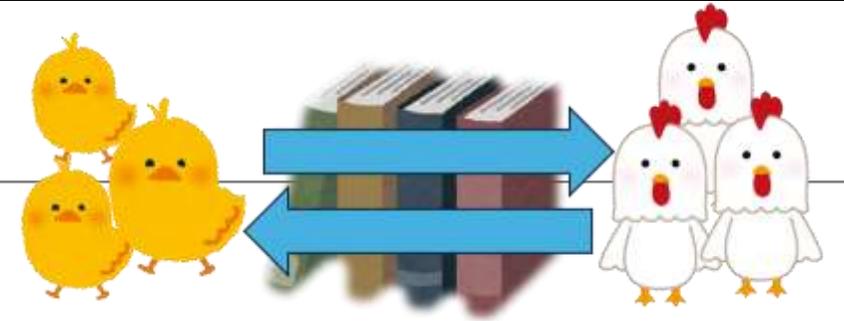
(「読書の役割」岡谷市PTA母親文庫運営委員会編集『湖辺第26号』1984, p. 73.)

物語から「脱線」したやりとりで交わされる情報は、親子が分かり合う糧

# 1990年代末～2000年代の母親文庫 母親達が、小学校で、子ども達に読み聞かせる



# 1990年代、悩める文庫担当役員



- **今の時代に、なぜ本の回覧を？**
  - ✓ 公共図書館は充実、イエ規範は脆弱化  
誰もが、自分の好きな本を、自分で選んで読める時代なのに
- **読まれない回覧本を管理する役員の仕事は徒労では？**
  - ✓ 回覧本が「読まれない」ことは文庫当初からままあったが  
読まれずとも、参加者間に読書仲間の意識を醸成する役には立った
  - ✓ しかし、読書を試みることの目新しさが薄れると・・・
- **役員は本／読書については素人**
  - ✓ 自分たちの選ぶ本に自信がない、ぜひ読んでと言いつらい

# 図書の素人の母親が選んだ本による読書推進の意義の発見

- **意義① 図書の素人が選んだ本でも読書推進には有効**

(旧来の配本活動の意義の再発見)



- ✓ 読書習慣のない人にとっては

- 定期的な本がもたらされること自体が有効

- ✓ 自分以外の人を選んだ本に接すると、読み手の視野や趣味が広がる

- **意義② 「母の声母の姿」での読み聞かせが、子の成長を支える**

(親子で一緒に読む中で、新たに発見された意義)

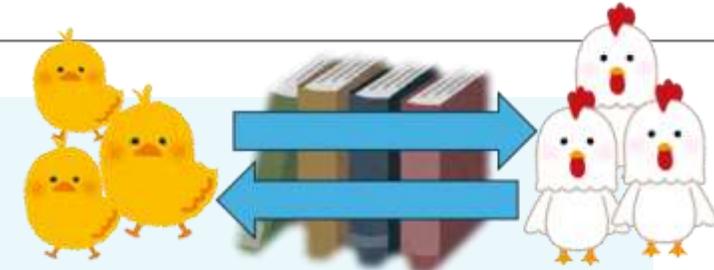
- ✓ 母親が読むことは、母を慕う子どもに応えること

**意義①のみならず、意義②をより良く満たすため、**

**配本中心の活動から小学校での読み聞かせ中心の活動に転換**

# 1990年代末～2000年代の母親文庫の読書の情景

## 小学校教師の感想



お母さん方の読み方や語りは、いつも やさしい においが あたたくかくて ほっとします。真似をしたくて、やってみますが、やりすぎてしまったり、なりきりすぎてしまったり...お母さん方のようには難しいです。「本当の お母さん方には かなわないなあ」

(「何ともいえぬ あったかい語り ——真似したいなあ・・・」『文庫だより第5号』2004.10.18.)

- **子どもの読書活動の推進に関する法律（2001制定）の後押し**
- **本を届けた子どもの反応を直接見られることで、文庫役員もやりがいを感じる（⇔配本時の「徒労」）**

# 1990年代末～2000年代の母親と子どもと本との関係



- **本の内容と同等以上に「母の声、母の姿」で読むことが大切**
- 母親と子供が、相手に自分の声、姿、表情を向けることは相手への関心を示す／相手からの関心に応えること

## これからの図書館への期待

「本との出会い、人との出会い」を創出し  
「本（資料）の内容+ $\alpha$ 」の  
情報伝達を支援する場へ

# 振り返り：母親文庫では「本の内容+α」の情報が流通

- 「読めない」と言い合う
  - 日常生活の外に目を向けるべき／向けていいと確認し合う
- 読書感想を手掛かりに、その人のものの見方を知る
- 本の内容にからめて、相手へのメッセージを語る、経験を語る
- 自分の声、姿、表情を相手に向けて読み聞かせる
  - 自分が相手に関心をもっているというサインを送る
- 本の内容にまして、その人と一緒に読めたことを喜ぶ
  - 一緒に読む人のかげがえのなさを伝える

# 振り返り：かけがえのない「+α」の情報

- **本に書かれていない、狭義の読書を越えて生じた情報**  
**かけがえのない「+α」の情報**
  - ✓ 「+α」部分は、狭義の読書という観点からすれば「余剰」の情報
  - ✓ だが、当事者にとっては、かけがえのない情報
  - ✓ これらの情報を得ることが読書の意義として語られもしてきた
- 「+α」の情報は本がなければ生まれなかった
- 狭義の読書が行われずとも、図書館が資料や場所を提供し、文庫の運営を支援し続けたことには意義がある

# 「本（資料）の内容+α」の情報伝達を支援する図書館へ

本が間近にある

過度に  
カスタマイズ  
されていない  
情報にも  
価値がある

自分以外の  
ひとの視点に  
出会う

「一緒に読もう」  
と言う／言われる

	「本+α」の情報の 生じ方	「本+α」の情報が もたらすもの	図書館／図書館員が 「本+α」の情報への アクセスを支援する方法
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>本（資料）が物理的に近くに存在することで生じる                             <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 本を手にとれること自体が価値</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>視野を広げよう／広げようと思ってい という意識</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>分館、文庫の設置</li> <li>電子図書はすぐ手に取れるという認識を普及</li> </ul>
B-1	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分以外の人の選んだ本（資料）に接することで生じる                             <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 表紙を見るだけでも効果○</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分1人では気づかなかったが自分に必要だった視点、資料、ジャンルとの出会い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>プロのレファレンス</li> <li>ブックリスト、講演会</li> <li>利用者同士が資料を勧め合う機会の創出</li> </ul>
B-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分以外の人の視点を容れつつ読解することで生じる                             <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 物語の外へ「脱線」するおしゃべりも重要</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他の人のものの見方や感じ方への理解の深まり</li> <li>言葉から汲める意味やイメージの広がり</li> <li>他の人に理解してもらうための伝達方法の獲得</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ファシリテーター／ファシリテーターの育成者としての図書館員                             <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 図書館員による母親文庫の「創作グループ」支援</li> </ul> </li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>誰かと読むことそのものから生じる                             <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 例：母の姿、母の声で読み聞かせてもらう</li> <li>✓ 例：一緒に読もうと声をかけられる</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の存在が気にかけているというメッセージ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○○による読み聞かせ会                             <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ ○○は母親、外国語話者、子ども、高齢者etc</li> </ul> </li> <li>敷居の低い読書会                             <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ その場で粗筋を教えてもらい、おしゃべり</li> </ul> </li> </ul>